春日在三笠乃山二、月船出遊士之、飲酒杯爾陰爾所見管、

〔萬葉集八冬相聞〕大伴坂上郎女歌一首

酒杯爾梅花浮、念共飲而後者、落去登母與之、

〔空穗物語菊宴〕玄ばしばかりありて、すきばこよつに、つらつきすへて、もみぢおりしきて、まづのくだ物もりて、くさびらなどして、おばないろのこはいなどまいるほどに、かりなきてわたる、きたのかたかはらけに、かくかきていだし給、

あき山にもみぢとちれるたび人をさらにもかりとつげて行かな

〔伊勢物語下〕むかし男有けり、その男いせの國に、かりのつかひにいきけるに、〇略中夜やう〳〵明なんとする程に、女がたより出す盃に、うたをかきて出したり、取て見れば、

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば、とかきてすへはなし、その盃のさらに、つゐ松のすみして、歌のすゑをかきつく、

又あふさかの關はこへなんとて、明れば、をはりの國へこえにけり、

〔源氏物語二十九行幸〕わざともなきに、おぼえたかくやんごとなき殿上人、藏人頭、五位の藏人、近衞の中少將辨官など、ひとがら花やかに、あるべかしき十餘人、つどひたまへれば、いかめしうつぎつぎの、たゞ人もおほくて、かはらけあまたゝびながれ、みなゑひになりて、をの〳〵かうさいはひ人にすぐれ給へる、御有樣を、もの語にしたり、

〔拾遺和歌集十七雜秋〕をみにあたりたる人のもとに、まかりたりければ、女どもさかづきに、ひかげを

そへて、いだしたりければ、　よしのぶ

在明の心ちこそすれさかづきにひかげもそへて出ぬと思へば

〔後奈良院御撰何會〕けふは朔日あすは晦日　さかづき